

第13回

北勢線の魅力を探る報告書

タケル遊歩道を歩く



善教寺



平群神社



中上城跡



瑞応寺

開催日: 2009年9月27日(日)

主催: 北勢線の魅力を探る会

後援: 桑名市、いなべ市、東員町、桑名市教育委員会

北勢線対策推進協議会、三岐鉄道株式会社

桑員ふれあいの道協議会、桑員まちのファンクラブ

都市環境デザイン会議中部ブロック

第13回北勢線の魅力を探る ~ タケル遊歩道を歩く ~

参加者：159名

協力：伊藤太助さん（久米地区連合自治会長）、水谷仁士さん、秦暎子さん、
水野顕明さん、善教寺、遍崇寺、瑞応寺、善正寺

当日タイムスケジュール

集合： 8：45 北勢線星川駅

コース 約12K：

（午前：約6.5K）

（午後：約5.5K）

9：00 星川駅出発

12：35 遍崇寺出発

9：15 郡竹治郎墓

12：50 中上（花戸）城跡

9：40 島田城跡

13：15 松本幸四郎家墓

9：50 善教寺

13：20 瑞応寺

10：15 野村増右衛門墓

13：55 善正寺（長深城跡）

10：25 櫛田神社

14：05 歌舞伎公園

10：35 大日堂

14：35 まちかど博物館・松ぼっくりの会

11：00 平群沢ため池公園・平群神社

14：55 東員駅

11：50 遍崇寺（昼食）

解散： 15：00ごろ 東員駅にて

西桑名駅の受付から坂井まで

西羽 晃

2009年9月27日（日）朝、やや曇り。7時50分ころ西桑名駅へ行くと、すでに集山さん、西村さんが来ていた。やがて担当者は全員集合。参加者もぼつぼつと集まって来る。津から来た人は三重郷土会の案内状で知って、北勢は知らない所が多いので、朝7時のバスで来ましたと。名古屋から来た人は桑名員弁が好きで、よく来ますとのこと。遠方からわざわざ参加される方があり、非常に嬉しくなる。

最近では西桑名駅から乗る方は少なくなっており、今回も受付の混乱もなし。定刻の8時23分発車。車内受付するほどはなし。馬道駅から乗車あれど、この駅でも受付をしてもらったので、助かる。西別所・蓮花寺からの乗車も少々あれど、簡単に受付は済む。

星川駅に着くと、自動改札もフリーになっている。駅前には黒山の人ばかり。当日配布の資料が不足しているとか。西桑名・馬道分が余っていたので、何とか配布できた。事前申込みも多かったが、当日申込みも想定外に多いので、びっくり。それでも受付は順調に済んで、近藤代表の挨拶が簡単に行われ、9時前に出発。私は何時もは最後尾に行くのだが、今回は先頭に遅れずに付いて行く。約160人の群れが延々と続く。



星川駅受付の様子



160人の群れが延々と続く



坂井橋を渡る

坂井橋を渡ると、すぐに墓地に着く。ここで私の説明。墓地の中央に郡家の大きな墓がある。中でも大きいのが「郡竹治郎」の墓。その横には「郡新一郎墓跡」の碑がある。竹治郎は北勢線の楚原から阿下喜東（のち六石と改称。現在は廃駅）までの工事を請け負った人である。彼はコンクリートブロックを積んだ、珍しい橋=ねじり橋と眼鏡橋=を建設した。私はねじり橋を始めて見た時の感動は忘れられない。あの優美な曲線は「ミロのビーナス」に匹敵する曲線と思っている。

新一郎は竹治郎の長男で、東京帝国大学工学部土木科を出て、南満州鉄道の技術者となり、理事待遇になった。新一郎が大学を出た年にねじり橋と眼鏡橋が出来ているので、大胆な推量すれば、コンクリートブロックを使用することを勧めたのは新一郎であったかも知れない。新一郎は昭和17年に49歳で大連にて死去。その子孫は鎌倉に住んでおられ、墓もそちらへ移したので、現在は跡地に由来を書いた碑が残されている。

隣の一角は分家の郡竹二家の墓地であるが、竹二さんが本家の墓を現在は守っておられる。この程度の説明をして、私の役目が早々と完了したので、その後の行程はほぼ最後尾で、のんびりと歩かせてもらった。

余談だが、竹治郎の次男の長男は現在アルゼンチン在住で、私の従姉と結婚しており、私と郡家とは薄いけれど、姻戚に当たる。従姉とは、ときどきメールで消息を交換している。



郡竹治郎墓



説明する西羽さん



郡新一郎墓跡

島田城跡から大日堂まで

集山一廣

郡竹治郎のお墓にこんなに多くの人々が訪れたことはなかったのではないかと思います。さぞかしびっくりしたに違いない。早々に次の目的地に向かった。坂井の集落と正和中学校の間を通り田園地帯を南に真っ

直ぐ歩くと次第に隊列は長くなり、参加人数の多さを実感した。この時間はまだ汗ばむほどではなく、風が爽やかで心地よかった。

県道桑名大安線は交通量が多く、行き交う車に注意を払いながら、さらに西に進む。目的地は現在の榊ハネックスのヒューム管工場の一部となっている島田城跡である。9時40分、敷地内に入ると鬱蒼とした小山が目に入る。この城には島田兵庫頭が居城していたが、永禄11年(1568)織田信長勢により滅ぼされた。古城図によれば相当の規模であったようである。下見の時には土塁状のものが残っているのを確認できたが、今回は時間の都合上、中に入らず、伊藤太助さんの説明をお聞きした。



島田城跡



説明する伊藤太助さん



島田古城図

島田城跡の西側の善教寺は浄土真宗本願寺派。本堂の前で、ご住職の島村敬之さんから善教寺、野村増右衛門のお墓、島田櫛田神社、大日堂の説明があった。

善教寺は弘仁3年(812)空海の開基と伝え、真言宗だったが、応仁元年(1467)僧隆教のとき蓮如上人の巡教により改宗し真宗になったと云われる。もと長島願證寺の末寺で長島一揆に加勢し、糧米を寄進するなど大いに力を尽くしたが、正徳5年(1715)願証寺が高田派に転派したときに従わず、本派に直属となった。当寺本尊(阿弥陀如来像)はこの地方出身の野村増右衛門吉正の持念仏(弘法大師作と云う)であると云われる。



善教寺



説明する住職の島田さん



野村増右衛門墓

野村増右衛門のお墓にある教育委員会の説明板によれば、野村増右衛門吉正は島田に生まれ、郡代の手代という軽い身分から、次第に重用された。河川改修工事や新田の開発など多大な功績をあげたが、宝永7年(1710)に、藩の公金を盗用した罪に問われ死罪となった。この時、一族44人が死刑となり、関係者も追放されたり免職されたりし、罪人の数は370人以上に及んだと云われる。この事件により藩主松平定重は越後高田(現在の新潟県上越市)に国替えを命ぜられたが、文政6年(1823)に、定重の子孫、定永が再び桑名へ国替えとなると増右衛門の罪は許された。文化6年(1809)に最勝寺(桑名市萱町)境内に建立された増右衛門の墓は昭和31年(1956)に島田自治会有志により島田櫛田神社境内に移され、昭和45年(1970)には、現在の場所に移された。以上が内容であるが、残念なこ

とに、この事件に関する限り、確かな藩関係文書は伝わっていないと云う。藩にとっての大失態であるから、すべてを処分したのではないかと云われる所以である。巷に伝わるものに「野村奸曲録」「桑名時雨蛤」その他聞書の写本があるのみであるとして、*「桑名の伝説・昔話」は、少しはこの事件の全貌に迫ろうとしているので参照されたい。（*桑名中央図書館）

櫛田神社はさらに石段を上がったところにあるので、パスされる方もあった。櫛田神社は島田城の西方の出城の役目を果たしていたのではないかと推測される。『延喜式』の中に朝明郡に櫛田神社と記載されており、古くは朝明郡に鎮座していたと云われ、天白明神、蔵王権現、牛頭天王の三座が奉祀されている。明治43年（1910）平群神社に合祀されたが、昭和26年（1951）に再び分祀され、元の地である現在地に戻された。櫛田神社本殿前の燈籠は野村増右衛門が寄進したものと云われ、燈籠竿石には「寶永弍乙酉年十一月吉日」と刻まれている。



櫛田神社



燈籠



櫛田神社上口にタケル遊歩道の看板がある

大日堂は野村増右衛門の持念仏と称される大日如来像を安置している小さなお堂のことである。もとは善教寺南の丘陵上にあったが、集落の中を通る往還脇に堂を新築し移転した。野村増右衛門が善教寺に寄進したという、三具足(香炉、ロウソク立て、花瓶)を置く前卓(まえじゃく)が保存されている。前卓の裏面に書かれた文字の大半が色褪せて消えかけているが以下のように記されている。

「勢陽員弁郡嶋田邑善教寺莊嚴之具為 覺幻童子菩提所 費皆出桑城之 武臣 野村氏吉 公
寶永（以下不明）」

このあたりの見所が集中していたのについのんびりとしてしまい、大日堂では10時40分と最後の組となってしまった。



大日堂



大日如来像



前卓の裏面

平群沢ため池公園

平群神社の南側にある平群池は「志知の宮池」と呼ばれヤマトタケルが足を洗われた池と伝わります。昔から願い事がある度に神様に供える魚を放生してきたので、魚や亀などがたくさん棲息していて、菱の水草が浮かぶ水の透きとおった御池でした。

春になると、数百羽の鷺が池の傍の傍らの樹に巣をつくり、秋まで生活を営んでいて、禁漁禁足地として固く守られてきました。御池の水があふれ、逃げた魚を子供が捕えてこようものなら、火の玉のようになって、叱りつけ戻させたものでした。明治生まれの義父が生存していたころのことです。

「片目魚」を捕って神罰が当たる漁師松右衛門のお話。殺生を戒める「九左衛門と白鷺」の民話は今も語り継がれてはいますが、宮池は平成10年県営水環境事業 環境整備事業によって、整備拡張され、憩いの場と、様変わり致しました。変わらないのは本地から流れる水が水田への灌漑用水として有効利用されていることです。



平群ため池公園の様子

平群神社

島田地内の整地された田をまっすぐ西に抜けると、高台です。そこからは、伊吹山、養老山脈（多度山）そして鈴鹿マウンテンの峰々の雄大なパノラマが開けていて、その平群の丘に平群神社が鎮座しています。平群神社に着くと、もう大勢の方が公園の方で、休憩されていましたが、境内に集まって頂いて、平群神社と平群沢ため池公園をまとめて説明致しました。

平群神社は延喜式の員弁郡10座の一つで、この地域をおさめた大和国（奈良県生駒郡平群町）を本拠とした古代豪族『平群氏』の始祖である「木菟宿禰（ずくすくね）」を大切に祀っています。平群神社は地元の人々の心のよりどころになっていて『へぐりさん』と愛称で呼ばれています。山自体が「神奈備」として信仰された円錐形の美しい平群山の中段の東斜面に、大木の杉や檜や椎の木に囲まれ本殿が建っているので、境内は昼間でも薄暗く、厳かな雰囲気です。春には濃い緑や薄い緑のなかに椎の黄色の花が沸き立つように咲きすばらしい山容です。是非一見を！日本書記に仁徳天皇と同日に生まれ易名したという吉祥伝説や大臣として威勢をふるった伝承をもつ平群氏は大和と難波をむすぶ龍田道周辺を勢力範囲としていたことから大和朝廷における重要な地位にあったと思われます。その平群氏の支族『味酒首（愛媛県松山が本拠）』が酒の上の失敗で桑名に移り、悔い改めて桑名の地に祖先を祀りこの地域を支配したのではと平群町の資料は推察しています。今から50年ほど前、社務所建て替えの際に土師器や須恵器が出土したことで、これまで古墳ではと思われていた本地は古代信仰の祭祀遺跡であるとされています。出土した土師

器・須恵器の一部を社務所と地区センターで保管しています。



平群神社一の鳥居



平群神社二の鳥居



説明する松岡さん

二の鳥居に入って左側に石積みの台に菱形の自然石に倭建命の国しのびの歌

「いのちの全けむ人は たたみこも 平群の山の くまがしが葉を うずにさせその子」

命つつがなく、無事大和へ帰る人は、幾重にも重なり合った平群の山の大きな榎の木の葉を飾りなさい。

若い子らよ。

東国遠征の帰途、伊吹山で思わぬ病を得てヤマトタケルが大和への帰途に平群池で足を洗われたという伝承があり明治26年氏子によって歌碑が建立されました。

昭和8年には地元で味噌たまり醸造を営む傍ら俳句を嗜まれ、松尾芭蕉の「冬牡丹」句碑の再建に尽力された小林雨月の狛犬句碑が奉納されています。

(右台座) 菊の世や多度も鈴鹿も一かすみ 雨月

(左台座) いろいろの草を沈めて秋の水 雨月

本殿への階段中段に鎮座しています。



倭建命の国しのびの歌



狛犬句碑左台座



狛犬句碑右台座



平群神社に沿って遊歩道を歩く



タケルの看板があちこちにある



田んぼ道を遍崇寺へ向かう

遍崇寺から善正寺まで

水谷一夫

遍崇寺

平群神社の出発は11時15分、集落の南、台地裾の道を西へ向かう。お昼前で次の東員町中上までは約1.5キロ。昼食場所の遍崇寺へ足を速めて向かうグループと、ちょっとお疲れグループの間隔が広くなり、列は長くなる。11時45分、皆さんが到着したところでご都合が悪い住職に代わって、西羽さんが説明をされた。

花戸山遍崇寺は真宗大谷派の寺、本尊は阿弥陀如来である。開基は古く天平年中(729~749)行基によると伝え、もとは天台宗。明応年間(1492~1500)花戸に城塞を構え、この地を支配していた坂太郎左衛門は敗戦ののち、戦乱の世をはかなんで剃髪して仏門に入る。そして当時、この地を布教していた蓮如の教えに帰依して本山に参詣、阿弥陀如来の絵像を拝領して帰郷し、一字を建立して遍崇寺と名付けた。

現在の本堂は明治11年(1878)に上棟し、同15年(1882)に落慶した。境内の経蔵には明治20年頃、四国の某寺から購入した「明版・大蔵経(だいぞうきょう・一切経ともいう。なお、明版の不足分は鉄眼版で補充する)」が所蔵されている。この經典は当寺第10世住職の花山大安が研究資料として求めた貴重なもので、大切に保存されている。

花山大安は元治元年(1864)当寺に生まれ、東大鐘村にあった大賀旭川の半学舎に学んだ。明治21年(1888)遍崇寺住職に就任、明治29年(1896)真宗京都中学校教授となり、同44年に大谷大学教授となった。昭和7年(1932)69歳のとき「講師」の称号を受け、翌年には本山安居(あんご・僧が一定期間外出しないで、一室にこもり修学すること)の本講で「末燈鈔」(親鸞の法語や手紙22通を集めたもの)の講義をした。昭和11年(1936)73歳をもって遷化。昭和24年(1949)境内に「大安講師記念碑」が建てられた。



遍崇寺山門



遍崇寺本堂



遍崇寺経蔵

説明が終わってから、午後の部の出発時刻は12時25分、お疲れの方はここから町のコミュニティバスを利用して穴太駅へ出て、お帰り下さい。と西羽さんから伝達があり、本堂の中や境内のあちこちをお借りして昼食を摂る。

ところで当日12時にお庫裡さんが鐘楼の鐘を打ってみえた。これは翌28日が親鸞聖人の忌日にあたるため、この日午後2時から行われる勤行を檀家の方たちに知らせるために鳴らされたものである。

中上城跡

昼食を摂って意気揚々として遍崇寺を出発、三狐子川の堤防道を西へ向かう。300メートルほど歩い

て花戸橋のたもと、「中上城跡」の表示板が建てられた所で、地元の水谷仁士さんから説明を受ける。

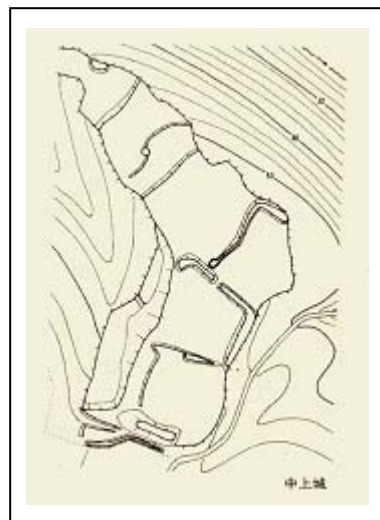
中上城は字西山の丘陵地にあり、明応年間（1492～1500）この地を支配していた坂太郎左衛門（坂兵左衛門とも坂中務ともいう）の居城で、戦いに敗れて廃城になったとされている。花戸城（城跡入口の表示碑）・鼻戸城とも呼ばれ、その規模は160メートル×60メートル。土塁や見張り番がいた所という小高い台地、館を構えたと思われる平坦地のほか、下の平地には馬をつないだ「ひょうたん馬屋」といわれる跡が残されている。



中上(花戸)城跡



説明をする水谷さん



中上城(『三重の中世城館』より)

さらに水谷さんは中上や中上人気質について、昔は員弁郡久米村の一部だったが、昭和30年（1955）志知・島田・赤尾など他の五大字が桑名市に編入したのとは別れて、前年に誕生した東員村へ編入合併した。当時、分村するについて、この地の人たちはムシロ旗を押し立て、志知にあった村役場へ押しかけるなど一騒動であった。

ここには産業として特筆すべきものはないが、明治30年（1897）頃から戦後しばらくまでの間、出稼ぎとして酒造りの仕事に出かけていた。中上酒六と呼ばれ、11月下旬から翌年3月中頃まで杜氏（とうじ）が人足を連れて近郷の酒蔵に出かけて働いていた。この冬場の出稼ぎが盛んに行われていたことを示すものとして、水谷さんは「老人会の名簿を見ると多くの人の誕生月が1・2月です。それは...」と、ユーモアたっぷりにお話し下さる。

昭和6年（1931）に開業した三岐鉄道について、当初の計画では梅戸から三狐子川沿いに中上を通って志知との境の比較的低い丘陵地を抜けて、大鐘・千代田の朝明川左岸を通る富田へ至る路線であったが、中上では「汽車が通ると農耕中の牛が暴れて困る」とか「鶏が卵を産まなくなる」などの意見が出て、鉄道の敷設に反対したため、現在の梅戸から保々への路線に変更されたこと。

また、員弁川に架かる念仏橋の由来について、明治37年（1904）遍崇寺の花山大安住職は川北（瀬古泉・穴太・山田・森忠）と川南（中上・志知・北山）地区の各寺院で法座があったとき、それまでは浅瀬を歩いて渡っていた員弁川に、寺の参詣の便を図るため、板橋を架けることを計画されて、法座の際に寄付金を募り、その架設費用に充てたことをお話しされた。そして中上城に伝わる「お菊虫」の話、城主に可愛がられていたが、無実の罪を着せられて自害したお菊という女中が、死後みの虫に似た虫になり、しっかりと枝にぶら下がって城を守っている。など水谷さんのお話は尽きることがない。

そこへ世話人の「さあ、出発しましょう」の一声。さらに三狐子川の堤を西へ、次の目的地、松本幸四郎家墓へ向かう。

三狐子川沿いの道を新国道365線の下をくぐり、台地上の集落に向かうゆるやかな坂道を上ると長深字東守の県道9号線に出る。この道は新濃州道ともいい、四日市市羽津で東海道から分かれて大矢知・平津・大鐘を経てこの地に至る。さらに西へ向かって長深のT字路で右に曲がって南大社・北大社・大木か

ら北へ、大泉茶屋の追分で桑名から西上してきた濃州道と合流する。

坂を登って出たところから西へ10メートル程、365号線と民家に挟まれた道の北に2基並ぶ墓碑の向かって右側（左の墓は台座に「一代目鳥羽海」とある）が、歌舞伎役者七世松本幸四郎家の墓碑である。縁者の秦瑛子さんがすでにお待ちになっており、お墓の前で松本幸四郎とのご関係や伝記についてお話しされた。この部分は後の西村さんが担当となっているのでお任せする。

瑞応寺

松本幸四郎家墓横の道幅の広い国道365号線の横断歩道を渡ると、道の右手に地元の方が「瑞応寺の金ぶっさん」と呼ぶ青銅製の観音像が目に入る。この如意輪観音像は明治38年（1905）10月に27歳の若さで他界された10世富川周雅師の長男、玄璋の三回忌法要に際し、周雅師は囑望していたご子息の死を悼んで造仏を祈願され、桑名の辻内鋳物が技術の粋を尽くして造立したものである。

長い参道を通って明治26年に建てられた風雅な鐘楼門をくぐって本堂に向かうと、ご住職はすでにお待ちになっていた。皆さんが集まると、まず、老朽化した庫裡の改築についてお話があり、「寺の建物で最初に悪くなるのは廊下で、そのことを老化現象と言います」という軽妙な語り口で、一同どっと大笑い。続けてお寺の由来についてお話があった。



瑞応寺の金ぶっさん



瑞応寺鐘楼門



住職のお話

慈恩山瑞応寺は臨済宗妙心寺派の寺で、本尊は千手観音菩薩である。文明年間（1469～86）妙心寺第十世景川宗隆（けいせんそうりゅう）の開基とされ、本尊の千手観音像は安阿弥（快慶）の作、平景清の持仏と伝えられるが、真偽は不明である。

正長年間（1428 - 29）長深の三代目領主富永富輝は、叔父春忠（別名池田入道）の目に余る乱暴狼藉に手を焼き就寝中に殺害しました。しかし、無念の死を遂げた春忠の怨霊は大蛇となって富輝や城中の家臣たちに危害を加えた。富輝はかつて御所警護のため上洛した際、懇意になった妙心寺の景川禅師に窮状を訴え、悪霊を鎮め、富永一族の菩提を弔うために一寺を開創し、その開山に迎えたい旨を伝えた。申し出を快諾した景川禅師による丁重な回向の効あって、その後、池田入道の悪霊が出没することはなくなり、城内は平穏な日々が戻った。富輝はそれまで中上の田辺にあった富春院をこの地に移し、瑞応寺と命名、富永家代々の菩提所と定めた。

景川宗隆は応永32年（1425）伊勢国に生まれ、19歳の時、尾張瑞泉寺の雲谷（うんこく）和尚に参じてから、寛正5年（1464）妙心寺第九世雪江宗深（せっこうそうしん）禅師より印証を得るまで全国を行脚、遍参して修行を続け、さらに悟後も明応9年（1500）76歳で示寂するまで10回近くも住持を転じるなど、一所不在の生涯を貫いた。

なお、この地には景川が幼年期を長深で過ごしたことが伝わっている。

その昔、どこから流れてきたものか5歳ほどの童を連れだした老婆が住み着き、忙しい人の洗濯を引き受け、僅かな報酬を得て生活をしてきた。目と足が不自由な老婆は、幼い童を杖代わりにして御用聞きに歩き、仕事をしていた。村から村へと歩いている途中で、村の悪童たちに悪戯をされたりする老婆を必死でかばい、介抱する童子を見て、村人たちは「この子はきっとただ者ではない。この先、世に出て国のため、人のためになる聖人になるに違いない。」と感心していた。そして富輝の願いで長深の瑞応寺に入山した景川を見て、村の古老たちは古い記憶にある幼子の姿を思い出したということである。

寺宝の景川禅師頂相（画像）は三重県の文化財に指定されており、さらに本堂には景川禅師の木像が安置されている。

善正寺（長深城跡）

瑞応寺を出て県道を西へ、なだらかな下り道を下ると道はT字路に突き当たる。左へ折れてすぐ右の急な上り坂を少し登ると右手が善正寺の山門である。東西に連なる台地の東突端からの景観は、往古の城跡に建てられた寺であることが彷彿とする。

富永山善正寺の本尊は阿弥陀如来、宗派は浄土真宗大谷派である。寺の創建について『員弁郡郷土資料』には「当寺八天正九年中ノ創立ニシテ開基八釈祐順也」とある。天正2年（1574）長深城主富永富知は、滝川一益の軍勢に敗れ、尾張に逃げたといわれている。その城跡に仏堂が建てられたのが当寺の始まりで、天文10年（1541）と伝えられるが定かではない。開基の祐順は天正9年（1581）入寂したが、享年は不明である。本堂は明治9年（1876）に再建、鐘楼は昭和22年（1947）山門は昭和25年（1950）に再建された。

また、本堂は長深城の本丸の位置に当たる所とされ、境内には最近まで城の土塁や石垣の一部が残されていたが、道路拡張工事により撤去された。長深城は暦応年間（1338～42）京都御所南門の警備を掌っていた富永筑後守富春が築城し、子の富継、孫の富輝と続き、代々南門の警護に当たった。富春は飯高郡河俣谷富永村の人、暦応元年（1338）御所火災に際して大功を立てて菊花御紋を拝領し、翌年長深に来て築城し、この地を支配した。四代目富知の時、長島一揆が起こり、元龜2年（1571）織田信長の軍によって長島が陥落し、天正2年（1574）長島城主となった滝川一益により夜襲を受けて長深城は落城した。富知は尾張に逃げ、隠退したといわれているが、一説には天正4年（1576）長島城に呼び出され、そこで切腹したとも伝えられている。

昭和63年（1988）境内に「長深城の跡」の碑が東員町教育委員会によって建てられた。さらにこの碑の横には城壁に使われたと思われる切石が置かれている。



善正寺



住職のお話



長深城（『三重の中世城館』より）

七代目松本幸四郎墓

中上城跡の見学を終え、員弁川の支流である三狐子川に沿って西進すると中上から長深に入りました。最初に訪ねたのは七代目松本幸四郎(1870~1949)の墓。参加者からは「どうして松本幸四郎の墓が東員町にあるの」という声があがっていました。実は七代目幸四郎は長深の秦家の出身で、縁あって梨園の名優松本幸四郎を襲名しているのです。



三狐子川を西進する



七代目松本幸四郎墓(左)



質問に答える秦さん

七代目幸四郎はもともと秦豊吉という名で、明治3(1870)年5月12日に長深の土木業「福田屋」の親方である秦専治・りょうの三男として生まれました。父は仕事の関係で家を留守にすることが多く、もっぱら母の手で育てられました。明治7(1874)年10月に一家をあげて東京に出て虎屋饅頭を商っていたところ、店の常連客になっていた舞踊の藤間流家元である二代目藤間勘右衛門(1840~1925、本名藤間金太郎)に請われて養子となりました。藤間家に入ってから養父と同名の金太郎を名乗り、明治13(1880)年3月に九代目市川団十郎(1838~1903)に入門して歌舞伎役者としての一步を踏み出しました。その後は四代目市川金太郎、八代目市川高麗蔵を経て、明治44(1911)年11月に七代目松本幸四郎を襲名しました。堂々たる体躯と風格ある容姿を活かした「勸進帳」の弁慶が当たり役で、生涯1,600回も演じました。昭和24(1949)年1月27日に80年の生涯を閉じましたが、死の前日まで弟子たちに舞の指導をするなど、まさに芸に生きた人生でした。

七代目幸四郎には3人の息子がおり、長男治雄(1909~1965)は贈十代目市川団十郎(1882~1956、本名堀越福三郎)の養子となって十一代目を襲名、現在はその長男夏雄(1946~)が十二代目を襲名しています。夏雄の長男孝俊(1977~)は十一代目市川海老蔵としてNHK大河ドラマ「武蔵 MUSASHI」の主演を演じて歌舞伎界以外でも高い知名度を誇ります。

次男順次郎(1910~1982)は八代目松本幸四郎を襲名、現在はその長男昭暁(1942~)が九代目を襲名しています。その長男照薫(1973~)は七代目市川染五郎を襲名しています。次女隆子(1977~、初代松本幸華、音楽家佐橋佳幸の妻)は松たか子の芸名で女優としても活躍しています。

三男豊(1913~1989)は二代目尾上松緑を襲名して藤間流家元を継承、後に人間国宝となり、文化勲章も受章しました。その長男亨(1946~1987)は初代尾上辰之助を名乗っていましたが、父に先立ったため後に三代目尾上松緑の名を贈られました。現在はその長男嵐(1977~)が四代目尾上松緑を襲名しています。

このように三人の息子が歌舞伎界の名門市川団十郎家(成田屋)、松本幸四郎家(高麗屋)、尾上松緑家

(音羽屋)の伝統を受け継ぎ、さらには娘異子が四代目中村雀右衛門(1920~)に嫁ぎ、門弟まで含めると、その薫陶を受けた者は数多く、歌舞伎界に遺した功績はあまりに大きいと言えます。

歌舞伎公園

善正寺から坂を下って長深の集落を北に抜け、歌舞伎公園に到着しました。ここでは七代目松本幸四郎の墓に続いて、ご親戚にあたる秦瑛子さんに説明していただきました。公園には芝生が敷き詰められていたため、長時間の歩行で疲れが目立つ参加者たちは腰を下ろし、くつろいだ雰囲気でお話を伺いました。生家の井戸の話や、青春期に芸に悩み歌舞伎をやめようと考えていたことなど、多くのエピソードを語っていただきました。その中で驚いたことは、秦家からは七代目幸四郎のみならず、もう一人の芸能人が生まれていたことでした。秦家は七代目幸四郎の長姉たくの婿英一が継ぎ、その後は三治郎、一雄、卓一郎(瑛子さんの夫)現当主の一司さんと続きます。卓一郎の妹千代さんは岡崎市議会議長をつとめた岡村秀夫(1932~2008)に嫁ぎ、その長女孝子(1962~)さんは椋山女学園大学の同級生加藤晴子(1963~)とともに「あみん」(さだまさしの楽曲「パンプキン・パイとシナモン・ティー」に登場する喫茶店安眠から命名)を結成、昭和57(1982)年7月21日発売の「待つわ」が大ヒットしました。翌年12月をもっていったん活動休止となり、ソロ活動にうつりましたが、平成19(2007)年6月に活動を再開、同年のNHK紅白歌合戦にも出場しました。

平成9(1997)年に整備された公園の一角にはせせらぎがあり、その中に七代目松本幸四郎の当たり役である弁慶をモチーフとした「弁慶わらべ像」(同年3月建立)が立っています。作者は愛媛県今治市の石彫家馬越正八(1941~)です。祖父の代から続く石仏師の家に生まれた正八は20歳の頃から父について石仏師としての修業を積み、自分の子が生まれて以降は子どもの愛くるしさを題材とした「童シリーズ」を制作するようになり、この弁慶像も子どもの姿をしています。台座には「七世松本幸四郎丈生誕の里」と刻まれています。



長深公民館にあるタケル遊歩道看板



歌舞伎公園



説明する秦さん

また、像の背後にはこども歌舞伎と松・弁慶を描いたレリーフがあり、その中心には「七世松本幸四郎丈生誕の地」碑が立っています。碑文には「古今の名優として日本歌舞伎界に不滅の足跡を印された東員町長深出身七世松本幸四郎丈の功績を顕彰し、歌舞伎公園を設置します。近年、町民各位のご尽力により伝統芸能を子子孫孫まで継承発展させたいという願いから、「こども歌舞伎」も誕生を見るに至りました。七世松本幸四郎丈生誕の地としての誇りをもち、歌舞伎文化を東員町に根付かせる拠点とします。平成九年四月 東員町」とあります。現在、東員町役場職員の名刺には歌舞伎公園と弁慶わらべ像の写真を印刷

したものがあり、町のPRにも役立てています。

まちかど博物館「松ぼっくり博物館」

東員町役場の東側に位置する東員町総合文化センターには桑員まちかど博物館のひとつ「松ぼっくり博物館」が開設されています。まちかど博物館の展示の中心となっているのは弁慶姿の「七世松本幸四郎」の銅像で、総合文化センターの正面入口を入ったホールの一隅に立っています。この像は平成17(2005)年7月31日の九代目幸四郎夫妻の来町に合わせて除幕式が行われました。制作者は富山県高岡市の彫塑家畑満(1951~)です。ここでは松の会前会長の水野顕明さん(秦家の菩提寺大雲寺のご住職)にご説明いただきました。長距離の移動とあって当初の予定より半時間以上遅れての到着になりましたが、水野さんは嫌な顔ひとつせず丁寧に話ししてくださいました。

松の会(現会長は学校法人暁学園理事長の宗村南男氏)は七代目幸四郎の顕彰、歌舞伎伝統文化の普及・継承・鑑賞・研究、こども歌舞伎の開催などを目的に、東員町合併40周年記念事業の一環として平成6(1994)年5月27日に設立されました。その名称は七代目幸四郎の自伝『松のみどり』にちなんでいます。設立総会は九代目幸四郎夫妻も出席して盛大に行われました。翌年6月からは桑名市在住の元歌舞伎役者吉良史郎(1929~、三代目市川松尾)さんの指導のもと、こども歌舞伎の稽古を開始し、平成8(1996)年5月19日に第1回の発表会を開催しました。その後も毎年開催されて今年7月には第14回発表会が催されました。平成11(1999)年11月には地域文化振興に寄与したとして三重県平成文化賞を受賞しました。

こども歌舞伎は子どもたちが演じるとはいっても内容は本格的で、会場は歌舞伎通の観客でいっぱいになります。とくに平成15(2003)年6月29日の第8回発表会には市川染五郎、平成17(2005)年7月31日の第10回発表会には九代目幸四郎が来町して盛り上がり、子どもたちとの交流も行いました。この際の写真はまちかど博物館で展示されており、いつでも見学することができます。九代目幸四郎・市川染五郎親子はいずれも多忙な日程のためなかなか来町が難しいため、名古屋の御園座公演などの際にはこども歌舞伎の仲間たちが挨拶に伺うなどして今も交流を続けています。



東員町総合文化センター 弁慶姿の「七世松本幸四郎」の銅像 説明する水野さん

この展示の見学を終えると近藤代表から挨拶があって自由解散となり、北勢線東員駅へと各自で向かいました。今回は参加者が多い上に、距離も長かったため、やや遅れての解散でしたが、天候にも恵まれて心地よい気候のもとで歩くことができ、幸いでした。

本報告では代数名称について「代目」を用いましたが、碑文などの関係上、一部「世」を使用しています。本報告作成にあたって七代目松本幸四郎ご親族の秦瑛子様、松の会事務局関谷靖子様より資料を提供していただきました。

第13回北勢線の魅力を探る 報告書
「タケル遊歩道を歩く」

編集・発行：北勢線の魅力を探る会

代 表：近藤順子

連絡先：いなべ市員弁町大泉 732（携帯電話 080-3073-3313）

発行日：2009年10月27日

<http://www.it-support.or.jp/link/hiroba/hokuseisen-HP/>

本報告書の著作権は上記発行者に帰属しています。ご利用の際は
ご一報ください。